

令和5年度(第74回)芸術選奨  
文部科学大臣賞 贈賞理由

## 令和5年度(第74回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	片岡 愛之助	大阪生まれ、大阪育ちの生粋の上方役者として貴重な存在。令和5年は当たり役「夏祭浪花鑑(なつまつりにわかがみ)」の団七九郎兵衛(だんしちくろべえ)を毛穴の一つ一つから大坂の匂いが噴き出すように演じ、市井の片隅で必死に男を磨いて生きる男の切なさにも踏み込む演技を見せた。「廓文章(くるわぶんしょう)」の伊左衛門(いざえもん)では上方和事の最高峰の役どころを絶妙のやわらかみとおかしみで体现。「三人吉三(さんにんきちさと)もえのしらなみ」のお坊吉三(きちさ)、「弁天娘(べんてんむすめ)おのしらなみ」の弁天小僧(べんてんこぞう)菊之助(きくのすけ)などの江戸歌舞伎、さらには新作歌舞伎まで幅広く、現代の歌舞伎界を牽引(けんいん)する一人と言える。
演劇	山西 惇	演じる人物の幅の広さに目を見張る。令和5年、「エンジェルズ・イン・アメリカ」では頑として同性愛者だと認めない憎々しい大物弁護士を、豪放磊落(ごうほうらいらく)な頑固者と子供のような無邪気さ、その両面を合わせ持つ独特な人物像に説得力を持って仕立ててみせた。また「闇に咲く花」では一転して繊細で内気な神主を緻密につくりこんで観客の共感をさらった。円熟味が増す近年、今後も唯一無二の人物像を数多く観客に届けてくれるだろう。
映画	岩井 俊二	ギリシャ語で「主よ」を意味するキリエ。「キリエのうた」とは、「キリエ・エレイソン(主よ、憐(あわれ)みたまえ)」を繰り返すミサ曲のこと。ここでは名前を捨てた二人の女性と、この困難な世を生きる人々へ贈る讃歌(さんか)でもある。震災によって、貧困によって、全てを失った二人が、自身の力と揺るぎない友情によって未来を切り開こうとする。それを音楽で紡ぐ。岩井俊二氏の映画は、作中の音楽同様、大量消費を目的とせず、必要とする人のために作られる。支持する層は広く、口伝えで国内外に広がっている。
映画	佐藤 浩市	「春に散る」では主役の一人として、元ボクサーを目つきも体の動きも鋭く説得力を持って演じ、脇に回った「愛にイナズマ」では一転、一見頼りないが芯のある父親をコミカルに見せた。青春時代劇「せかいのおさく」では、重しとして若者たちを支える。佐藤浩市氏は年齢を重ねるごとに奥行きと深みを増し、役の剛柔、大小を問わずしなやかに演じてスクリーンに存在し続ける。後進に心を配る姿勢も含め、円熟という言葉がふさわしい。
音楽	杉山 洋一	杉山洋一氏は、令和5年、本拠の欧州はもとより、我が国においても極めて充実した活動を行った。作曲界の巨匠、湯浅譲二の「作曲家のポートレート」と題された演奏会では、東京都交響楽団の指揮台に立ち、新作「オーケストラの軌跡」初演のほか、彼の1970年代半ばの傑作に新たな光を当て、さらに20世紀の古典を鮮やかに現代に甦(よみがえ)らせた。加えて、NHK交響楽団の公演で余人をもって代え難い存在であることを改めて印象付け、また、自作「ヴァイオリン協奏曲「ラ・フォルリア」」の初演でも、豊かな才能を遺憾なく発揮した。
音楽	福原 徹	篠笛(しのぶえ)の澄み渡った音色と能管の力強い表出力を駆使し、長唄や浄瑠璃を彩る邦楽囃子(ほうがくばやし)の笛。これに加えて福原徹氏は、独奏曲や笛中心の合奏曲の創作と発信を通じて、ともしれば脇役の立場に置かれがちな笛の世界を拓(ひろ)げてきた。近年は箏曲(そうきょく)との合奏においても、尺八や胡弓(こきゅう)に代わる新たな笛の手付(てつけ)によって楽曲に清新な陰影を与えることに成功している。「第13回福原徹演奏会 徹の笛」をはじめとする2023年の公演は、こうした多彩な活動の成果が集約的に示される場となった。
舞踊	鈴木 稔	鈴木稔氏は、スターダンサーズ・バレエ団の常任振付家を長く務め、これまで着実に実績を積み重ねて日本のバレエ界を支えてきた。中でも令和5年に再演されたバレエ「ドラゴンクエスト」では、ゲームとバレエを融合させた世界観を見事に舞台化し、バレエという芸術の可能性を押し広げた。古典作品をオリジナルの物語で作り直した「くるみ割り人形」も、氏の演出・振付の創意が光る魅力的なバレエ作品である。令和5年はコンテンポラリーダンス作品「MISSING LINK」でも、独創的な振付語彙で変化に富んだ構成を実現し、優れた成果を上げた。

## 令和5年度(第74回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	吉村 古ゆう	「こうの鳥」の主演・母鳥を研ぎ澄ました舞で表現した。父鳥との情、抱卵の静かな愛、タカと戦う激しい母性、悲劇的な死と、傑出した力量を示した。吉村流4世家元、吉村雄輝作舞・演出・主演の初演から64年ぶりの復活。意義は大きい。「善知鳥」は、地獄に墮(お)ち救済を願う獵師の霊を、しなやかに流麗な舞で表現。雄輝初演の型も伝えた。「日本舞踊キャラバン京都公演」で「雪」を着流して舞ったのも十分な実力を示した。
文学	柴崎 友香	柴崎友香氏の「続きと始まり」は、無関係な3人の男女の、2020年3月からの2年間を、個別に描く長編。未知の病原体の出現で「日常」を奪われた彼らは、経験した震災や映像で知る事件の記憶を引きずりながら、日々を過ごす。だが感じたことは、時の経過とともに少しずつ失われているのだ。静謐(せいひつ)な文体で、社会の光景と、個人の渾然(こんぜん)とした内部を、地道に確実に捉えていく。現代小説の新領域を開く、優れた作品である。
文学	乗代 雄介	乗代雄介氏の「それは誠」は、高校生たちが修学旅行の自由行動に割り当てられた時間でささやかな冒険をするという、友情を基礎にしたストレートな青春小説であると同時に、孤独感を覚えながら生きることを肯定しようとする意志に貫かれた小説である。語り手の「誠」という名前が示唆するように、小説が言葉で成り立っているという意識も明らかで、ところどころにハッとするような言葉や胸を打つ言葉が見いだせる。小説の面白さを知ってもらうためにも、是非多くの若い読者に読んでもらいたい作品であり、高く評価したい。
美術A	蔡 國強	国際的に高く評価されている蔡國強氏は、火薬で屏風(びょうぶ)に描いた作品を発表した1991年の個展「原初火球(げんしょかきゅう)」展を、その後に展開する各プロジェクトの重要な出発点と位置付けている。本展では、この30年前の作品から近年のネオンを使用したキネティック・ライト・インスタレーションまでを同一会場内に展示し、自身の活動の軌跡と未来への展望を示した。特集展示「蔡國強といわき」は、作家としての形成期を過ごした日本への想いを伝えている。
美術A	須藤 玲子	布は本来、何かを纏(まと)うために作られた素材(支持体)であるが、須藤玲子氏の「布」はそれ自体が綿密に構築された立体造形である。氏は、氏を支えるチームNUNOや各地の工房、職人と共に実験を繰り返し、布そのものを主役に表現の可能性を探る。2.5mの巨大な鯉(こい)のぼりを大量に中空に泳がせる一方で、小さな布片をびっしりと並べて体感させる。2019年香港のCHATに始まった個展の欧州凱旋(がいせん)帰国展となる当概展は、日常のささいな発想から生じる過程を、素材、道具、素描、映像、音と布で会場構成した。テキスタイルが、新旧の技術や感性の融合であると同時に人々の生活を護(まも)るサステイナブルな社会性の象徴となり得ることを示した。
美術B	石川 真生	戦後、アメリカ統治下の沖縄に生まれた石川真生氏は、1970年代から半世紀にわたり、土地と生そのものを沖縄で生きる人間として撮り続けている。人々の生き様が圧倒的な写真の力で生々しく集積された作品群は、国内のみならず国際的にも高い評価を受けている。2023年には、東京では初となる初期代表作から最新作まで一堂に会する大規模個展「石川真生 私に何ができるか」が開催された。2014年からは、琉球(りゅうきゅう)国時代から現代までの歴史を紡ぎながら、住民たちとつくりあげる創作写真とも呼ばれる大作のシリーズ「大琉球写真絵巻」に取り組み、闘病の中にあっても写真家として「私に何ができるか」を実践し続けている。
美術B	宮本 佳明	宝塚市立文化芸術センターでの「入るかな? はみ出ちゃった。～宮本佳明 建築団地」は、宮本佳明氏が設計してきた建築作品群のそれぞれ一部分を実寸大模型で紹介する企画展であった。「震災の記憶」とどめる「ゼンカイ」ハウスでも知られる氏の「建築とは記憶の器である」という考えは、従来の建築展を大胆かつ創造的に逸脱する手法によって、広く一般の観客に届く魅力を獲得した。建築家としての思想と矜持(きょうじ)を柔軟にひらいてみせた姿勢は、説得力を持って評価された。

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	井上 雄彦	「THE FIRST SLAM DUNK」は映像化されていなかった原作のクライマックスを、原作者の井上雄彦氏自らが監督して映画化した。映画の大半は3DCGが用いられたが、氏自身が大量の絵を描き下ろし指示を出すことで、氏のビジョンが見事に映像として定着された。これはまごう方なき“アニメーション映画監督”の仕事である。国内外での大ヒットも、この仕事あつての達成と言える。また本作で新たに描かれた家族のドラマは、原作連載時から現在に至る間における、氏の作家的な深まりを感じさせるものでもあった。
メディア芸術	田村 由美	少女漫画界で長期にわたり第一線を走り続ける田村由美氏。文明崩壊後の日本を描く冒険譚(ぼうげんだん)「BASARA」や、SFサバイバル「7SEEDS」、そして2022～2023年、ドラマ・映画化もされ大ヒットした「ミステリと言う勿(なか)れ」などジャンルを問わず幾つもの名作を生み出してファンを虜(とりこ)にしてきた、日本の漫画界を代表する作家である。魅力あふれるキャラクターが繰り広げる重厚かつ壮大なストーリーを次々と生み出してきた氏は、2023年でデビュー40周年を迎えた。40年もの長期にわたって第一線で活躍し、常に新境地を開拓していくその手腕と功績に芸術選奨をもって敬意を表したい。
放送	野木 亜紀子	野木亜紀子氏が脚本を手がけた「フェンス」は、沖縄をめぐる諸問題を徹底的な取材を基に真正面から描いた勇気あるドラマである。タイトルは米軍基地を囲むフェンスを指し、日米地位協定による基地への不可侵性を意味する。しかし、それだけではなく、本土と沖縄、男と女、親と子、肌の色など様々なところに不可視のフェンスが存在することを鋭く描き出した点に本作の真髓がある。私たち自身も無自覚的に創り出しているフェンスにいかに気づき、二元論を超えてゆくかを真摯に問う、稀有(けう)な脚本である。
放送	山崎 裕侍	「閉じ込められた女性たち～孤立出産とグレーゾーン～」は、「望まない出産」に追い込まれた一人の女性を、胎児殺害の刑事被告人としてでなく、不寛容な社会で行き場を失った弱者として描いた。山崎裕侍氏は、主人公と同世代の女性記者をディレクターに配し、その共感の眼差(まなざし)を作品に反映させた。氏の取材の原点は「権力の監視」である。過去の作品においても「民主主義の危機」や「核のゴミ」など、この国に山積する「歪(ゆが)み」に果敢に切り込み、強い説得力で視聴者に発信し続けた。
大衆芸能	宝井 琴調	軍談や世話物など講談の多彩を縦横無尽に読み込む話芸は定評が高く、中でも兄弟の情、主従の情の描き方は抜きん出ている。名将伝である「名月若松城」では、主従の相聞や意地を持ち前の柔らかい話芸で伝えた。高座の一方、令和5年は講談協会の会長に就任し、新たな講釈場の獲得や後進の育成にも尽力。講談の旗を守り続ける最前列に立つ。落語協会にも所属し、落語の老舗定席・鈴木演芸場では夏冬にトリを務めるほど重宝されている。話芸と指導性、その両方を高く評価できる。
大衆芸能	藤井 フミヤ	昭和58年、チェッカーズのリードシンガーとしてデビュー。「ギザギザハートの子守唄」「涙のリクエスト」など多数のヒットを放ち、ファッション面も含め社会現象を巻き起こした。解散後はソロ活動へ。平成5年のシングル「TRUE LOVE」は200万枚超の大ヒットを記録している。さらに音楽と並行してアート作品を発表したり建築関係のプロデュースを手掛けたり、幅広く活動中。令和5年からはデビュー40周年を記念した「40th Anniversary Tour 2023-2024」で全国47都道府県60公演を展開し、変わらぬ勢いを印象付けた。
芸術振興	荒井 洋文	荒井洋文氏が平成28年にオープンした民間の文化施設「犀(さい)の角(つの)」は上演、地域演劇支援、上田街中演劇祭などを実施するほか、地域NPO法人や映画館、市民、行政などと協力し「のきた」と名付けた緩やかな連帯を築いている。氏は、地域の人々に寄り添う独自の事業を推し進め、令和5年は、さらに、インド・ケーララ州にある劇場との共同創作や、様々な分野で表現に携わる35歳以下の若者を対象とした短期研修プログラム「表現/社会/わたしをめぐる冒険」を開催し、従来の劇場の役割を超えた「未来の劇場」の可能性を示唆する活動を展開した。

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	ルシール・レイボズ 仲西 祐介	東日本大震災後に東京から京都に居を移し、わずか2年で「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」を創設。国内外から多数の写真家を招聘(しょうへい)し、10年の間に世界有数の写真祭に育て上げた。2023年には、音楽フェスティバル「KYOTOPHONIE」も開催。二人の関わりが深いフランス、アフリカ諸国、ブラジルなどの表現者を日本に紹介したことは、特に意義深い。活動拠点を京都市内の出町櫛形(ますがた)商店街に置き、地元コミュニティとの交流も積極的に行っている。
評論	鈴木 聖子	舞台・映画で情味深い演技を見せた小沢昭一は、俳優とは、芸能とは——と自ら問う人でもあった。1970年代、全国の門付芸(かどづけげい)などを訪ね歩き、録音したLPシリーズを残している。本書はこの稀有(けう)な仕事と向き合う。丹念な調査・取材に基づく学術性と人間的洞察を兼ね備え、葛藤、矛盾を引き受けて小沢が到達した境地を浮上させる。なおかつ一冊を通じ、伝統音楽・芸能を「保護」する営為への真摯な問いが響き続けている。その点でも、芸術選奨文部科学大臣賞を贈られるべき成果である。
評論	マイク・モラスキー	本書は19世紀に遡るアメリカ史の大きなスパンの中で、ヨーロッパ音楽の典型といえる鍵盤楽器がいかに解放奴隷によってまず飼(な)らされ、人種を超えて共感を受け、ほかに類のない即興芸術を創造してきたかを掘り下げている。ピアニストが育った都市の気質や活動都市の興行界の大枠に触れつつ、個人としての豊かなエピソードやインタビューを適材適所配し、その理解を踏まえて傑作録音の聴きどころに、自らのピアノ演奏経験を活(い)かして具体的に言及している。アメリカ文化と音楽について教わる点が多いばかりか、文の構成もまた巧みで授賞に値する。

令和5年度(第74回)芸術選奨  
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	生田 みゆき	イスラエルに収監されるパレスチナ人政治犯の「日常」を再現する「占領の囚人たち」では、キャストとともに現地を訪れ、その体験をも作劇に織り込むことで、日本の観客に距離感なく過酷な現実を知らしめた。「産む性」である故に葛藤する三世代の女性の物語が同時進行する「アナトミー・オブ・ア・スーサイド」では、緻密に絡み合う重唱の楽譜にも似た実験的な戯曲を、果敢かつ丹念に解析した。「いま」をとらえる知性と感性に加え、困難を具現化する胆力と行動力にも恵まれた、頼もしき新鋭である。
演劇	中村 勘九郎	技芸に優れ、古典から新作まで時代物、世話物を問わず人物を活写している。舞踊でも力量を発揮し、今後の活躍が大いに期待される。祖父十七世中村勘三郎初演の舞踊「大江山酒呑童子(おおえやましゅてんどうじ)」では、愛らしい童子姿を見せ、酔態から鬼への変化も見事であった。「金閣寺」の久吉では確かな台詞廻(まわ)しで古典の二枚目らしい品位と清潔さを感じさせた。新歌舞伎「新門辰五郎(しんもんたつごろう)」で務めた会津小鉄(あいづのこてつ)のシャープさと情味を併せ持つ造形も光った。
映画	池松 壮亮	池松壮亮氏は、2003年の映画デビュー以来、60本近い出演作のジャンルを問わず、常に映画の中で存在感を示し、その空間の品位を高めることに貢献してきた。2023年も「せかいのおさく」では下層の青年役をリアルに演じ、「白鍵と黒鍵の間に」では市井のピアニストに扮(ふん)し、そして「シン・仮面ライダー」では、苦悩するスーパーヒーローを演じた。それぞれ監督との強い共犯関係を築き、一貫して真摯に役柄に取り組み、映像表現の新たな可能性を提示してみせた。今後のさらなる飛躍を期待したい。
映画	鶴岡 慧子	およそ400年前から変わらず、バカ丁寧に48工程の手間をかけて生み出される漆器(しっき)「津軽塗」は「バカ塗り」と呼ばれる。この伝統工芸を継ごうとする娘をじっと見つめる映画「バカ塗りの娘」では、鶴岡慧子氏の胆力に感服させられるとともに、映画もまた、手間暇かかる、人の手による創作物であることに改めて気付かされる。130年に迫る歴史と社会的地位の変遷から、昨今映画は「伝統芸能」と呼ばれたりもするが、どっしりと揺るがず伝統を継ぐ氏への期待は高まる。
音楽	大西 宇宙	声量の充実、言葉の丁寧な扱い、表現のこまやかさ。大西宇宙氏はあらゆる点において、現在、一頭地を抜いた我が国のバリトンであり、2023年は、多様なジャンルでそれを証明してみせた。ワーグナーの「ニュルンベルクのマイスタージンガー」(びわ湖ホール)では、パン屋コートナーに滑稽(こっけい)にして不遜(ふそん)という輪郭をくっきりと付与。「ドン・ジョヴァンニ」(兵庫県立芸術文化センター)題名役での活躍もさることながら、脇役をここまで造形できるのは、優れたオペラ歌手の証である。ほかに、井上道義氏作曲のオペラ、パッハ・コレギウム・ジャパンとのシューベルト「ミサ曲第5番」なども忘れがたい。
音楽	菊央 雄司	江戸時代の地歌箏曲家(じうたそうきよくか)は、歌、三絃(さんげん)、箏(そう)、胡弓(こきゆう)とともに、表芸である平家も演奏した。菊央雄司氏は、その全ての伝承を現在につなぐ稀有(けう)な存在である。令和5年には、それら全てに優れた活躍があった。伝承の危機にある平家の担い手としての実力を示し、大阪の菊原琴治(きくはらことじ)系統の胡弓の魅力を紹介した。「菊央雄司地歌演奏会」では、菊原琴治の時代の「野川三味線」を用いて、作物(さくもの)、繁太夫物(しげたゆうもの)、三味線組歌を演奏し、地歌に伝わる多彩な声の表現と大阪系の三絃の豊かな音色を、高い技量と表現力で披露して観客を魅了した。
舞踊	秋山 瑛	海外での活動を経て平成28年東京バレエ団に入団した秋山瑛氏は、古典から近・現代にわたる同団レパートリーを次々に踊り、正確な技術と鋭敏な感性で観客の心を捉えてきた。近年の成長は著しく、令和5年「ジゼル」での繊細かつ凛(りん)とした心理表現、「眠れる森の美女」の圧倒的な華やぎは、バレエダンサーとして確実にスケールアップしたことを印象付けた。また金森穂の新作「かぐや姫」では自ら創造に関わりつつ表現を紡ぐ新たな領域に挑み、主人公の孤独と神秘性をしなやかな動きで可視化。輝きを増す表現は、更なる飛躍を期待させる。

## 令和5年度(第74回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	速水 涉悟	速水涉悟氏は、平成27年ユース・アメリカ・グランプリNYファイナル金賞、審査員特別賞などを受賞し、アメリカでキャリアを積んだ後、平成30年新国立劇場バレエ団に入団。以後華麗なテクニックと豊かな表現力で令和2年主役デビュー。令和5年6月「白鳥の湖」終演後舞台上でプリンシパルに昇格。2023/2024シーズン開幕初日を飾る米沢唯との10月「ドン・キホーテ」では音楽性溢(あふ)れる強靱(きょうじん)、華麗なテクニック、表現で粋なバジルを演じ切り観客を魅了した。その後も主演が続き将来が大いに期待できる。
文学	高瀬 隼子	高瀬隼子氏の「いい子のあくび」は、「いい子」を演じ続け憤懣(ふんまん)をためてきた女性が主人公で、その周囲を見る目には強烈な毒が伴う。スマホをいじりながらの歩行など日常の「小さな社会問題」を取っ掛かりにしつつも、単純なメッセージ発信に主眼があるわけではなく、情性化した現実認識を鋭く痛烈に破壊しながら、爽快なほど転覆的な語りが展開される。文章にも隙が無く一文一文に軽快なスパイスが効き、複雑で多層的な言葉の世界の構築を助けている。作家の知性と透徹した洞察力が感じられる作品で、文部科学大臣新人賞にふさわしい小説的達成に至っていると思われる。
美術A	安藤 正子	安藤正子氏は、独特の視点から高度な絵画技術をもって優れた絵画作品を制作しているが、近年は陶、映像、インスタレーションなどの表現も併せて展開している。家族や身の辺の諸事に目を留め、変化や移ろいを様々な手法で視覚化させる表現は自然や人の「生」そのことに向けられている。「安藤正子展 ゆくかは」は、代表作の絵画作品から新作まで、氏のこれまでの創作営為を総覧する展覧会であった。 現在、世界の至る所で起きている多くの厄災に対して、氏は自らの生活圏内で日々の光陰を見つめ、存在の様相を深い感情で掬(すく)い上げ向き合おうとする。その精神と大いなる試みは今後さらにその芸術の領野を広げてゆくことが期待される。
美術A	大巻 伸嗣	大規模なインスタレーションを展開する大巻伸嗣氏は、鑑賞者の身体感覚に働きかけ、展示空間を非日常的な空間に変容させる。今回発表された「Gravity and Grace」の最新バージョンとともに、真つ暗な展示室で発表された「Liminal Air Space-Time 真空のゆらぎ」は、風を孕(はら)むことで刻々と動き、変化する布の姿が観客を圧倒する。量感を変化させ続ける新しい彫刻の可能性を示してもいる。近作の言語と映像による作品を含め、人間存在自体を問う彫刻家の今後を期待したい。
美術B	梅田 哲也	令和5年の梅田哲也氏の活動の中で、とりわけ個展「wait this is my favorite part 待ってここ好きなどこなんだ」で極めてユニーク且つ優れた作品が発表された。氏が作品の素材とするのは、音、光、影、記憶そして開催地の歴史等、形のないものばかりだが、強く人の心に響き印象を残す。既存の建物や土地、それに付随するものが装置としてあるが、現象の鑑賞体験が実存する全てである。一貫した20年余りの創造的行為がこの個展に結実され、さらに今後が期待される飛躍の年となった。
美術B	西澤 徹夫	それ自体が観られる対象となるまでに際立たせることが建築の目標になって久しい建築界の中で、西澤徹夫氏は、それとは全く逆に、そこでの人々の振る舞いを一つの質に整えながらも、各人それぞれが自由に振る舞える背景としての建築のあり方を模索し実現してきた。こうした、主役のあり方を規定しつつも、そこを偶然が羽ばたく場とする脇役に徹する試みを、建築ではなく自らの個展という別の形において緻密に構成しきったことは、この方法がより広がりのある可能性を持つことを証明したと言え、高く評価できる。



## 令和5年度(第74回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	加藤 隆生	リアルな場で大勢が集まってプレイする謎解き体験「リアル脱出ゲーム」を作り出し、ありとあらゆる工夫と挑戦を繰り広げ展開してきた加藤隆生氏とその仲間たちは、常にファンを増やし続けてきた。幕張メッセのホールをフルに使った大規模な「終わらない夏祭りからの脱出」や、継続的な常設店舗での展開、実験的な試み、家庭で遊ぶパッケージ型のリリースなど、その活動は、謎解きのみにとどまらずエンターテインメントの世界全体に影響を与えている重要な取組である。
メディア芸術	和田 淳	和田淳氏のアニメーションは、我々の五感を刺激する。体毛の手触り、耳元で聞こえる息遣いと吐く息の匂い、滑るような肢体の柔らかさなど、この作品は我々が忘れかけていた感覚を呼び覚まし、それを味わう快感を思い起こさせてくれる。 氏の作品が、奇抜な設定と個性的なビジュアルにも関わらず、広く世界中の人々の支持を集めている理由は、氏の高い作画技術とともに、これらの、人類に共通した感覚の核心を突いているからではないだろうか。
放送	石原 大史	「“冤罪”(えんざい)の深層～警視庁公安部で何が～」は、不正輸出の冤罪(えんざい)が生み出された深層／真相を徹底した取材で明らかにする調査報道の傑作である。企業、警視庁公安部、経産省など関係者への取材、法廷での生々しい証言、内部告発の手紙の文面、輸出機械の構造、規制に関する資料など番組で提示される情報は全て具体的で、重要な証言は番組独自の取材から得られている。ジャーナリズムの志を貫く姿勢、報道番組としての構成、共に優れており、現代社会に深く切り込む石原大史氏の取組は芸術選奨文部科学大臣新人賞に値する。
放送	長田 育恵	長田育恵氏は劇作家として主要な演劇賞を受賞している。テレビドラマの脚本作品は多くないが、志賀直哉(しがなおや)原作の「流行感冒」(2021年NHK)では確かな人間描写で高く評価された。「らんまん」では、モデルとなった植物学者・牧野富太郎博士が多くの障壁に直面しながらも、「名もなき草はない」という思想を貫く姿を生き生きと描いた。妻をはじめとする多彩な登場人物へのまなざしも一貫しており、演劇で培った力量が放送の世界でも発揮されることを大いに期待したい。
大衆芸能	桂 小すみ	甲高(かんだか)い喋(しゃべ)りが明るい。達者な三味線と唄は通常の寄席の俗曲(ぞつきょく)にとどまらず、洋楽と邦楽の折衷に、観客の驚きと笑いを生み出す。三味線を置いて他の楽器を取り出すこともしばしば。元々の音楽歴に、寄席囃子(よせばやし)での相当の蓄積ののちに、前座修業から音曲師(おんぎょくし)として高座に上がり、その全てを紡ぎながら、この数年での芸の駆け上がりは目を瞠(みは)るものがある。三味線のベースの上に、かつてない寄席の芸が生み出された。大きな期待ができる。
大衆芸能	ねづっち	落語家の心得の一つである謎かけを、子供から大人までエイジレスで楽しめる芸に昇華させた功績は唯一無二。漫談家としての話芸も群を抜き、平成23年より開催中の単独ライブ「ねづっちのイロイロしてみる60分」では、50分近い漫談で観客を釘付(くぎづ)けにする。YouTube「ねづっちチャンネル」の登録者は25万人を超え、毎日新ネタをアップする日常を10年来続けている。落語芸術協会、漫才協会に所属し、年間出演数は約500回。寄席芸人としての存在感も目を見張る。
芸術振興	今西 善也	京都祇園の老舗和菓子屋の店主として伝統を守り続けるかたわら、時代に合った菓子づくりも試みている。他方、文人墨客(ぶんじんぼっかく)に愛され、文化サロンとして機能していた店の理念を受け継ぎ、文化芸術を支援。2021年に美術館「ZENBI- 鍵善良房 -KAGIZEN ART MUSEUM」を開設した。鍵善が保有する美術工芸コレクションを公開する一方、2023年には京都出身の現代アーティスト宮永愛子の個展を開催。民間における芸術振興の模範例の一つと呼べるだろう。

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	川崎 陽子	川崎陽子氏は、京都国際舞台芸術祭の3人の共同ディレクター(他は塚原悠也氏、ジュリエット・礼子・ナツ氏)の統括的立場として、国内外の「実験」的な舞台芸術を創造・発信し芸術表現と社会を繋(つな)ぐというミッションを継承しつつ、さらに関西圏の歴史・文化資産を活用した地域振興、令和5年からは継続的な運営の柱として寄付を募る「KEXサポーター」制度を開始。芸術祭を新しい切り口で持続可能な国際的なプラットフォームとして発展させた功績は大きい。
評論	原 瑠璃彦	原瑠璃彦氏は、本来、海辺の風景をさした洲浜(すはま)が、平安時代以来の文化の中で、いかなる意味を持ち、機能してきたかを横断的に論じる。左右に分かれて、和歌を詠み優劣を競う歌合(うたあわせ)において、モノとしての洲浜台(すはまだい)が使われたことに着目する。本書の特色は、和歌にとどまらず、美術、庭園、宗教、能楽にも関わる洲浜の表象を、野心的に渉猟する強い意志にある。今後の展開を期待させる業績となった。
評論	堀 朋平	「未完成交響曲」の不完全な儚(はかな)さ。歌曲集「冬の旅」の果てしない彷徨(さまよ)い。弦楽四重奏曲「死と乙女」の強迫的妄執。シューベルトの音楽は、現代人のかたち定かならず不安に苛(さいな)まれる心を尖鋭(せんえい)に先取りする。本書はそんな作曲家の見事な分身だ。書物そのものが、シューベルトの影法師であるかのような捉えがたい迷宮的構造を有する。作曲家の魂と同行二人となって、幽体離脱するかのように時空を駆け巡る。極端に微視的か、極端に巨視的か。中庸に収まるところがない。シューベルトはそうにしてしか論じられぬと本書は教える。組立ての独創性において傑出した音楽批評である。堀朋平氏の今後に期待する。